

平成27年度沖縄群島病害虫発生予報第9号(12月予報)

I 12月の気象予報

向こう1か月の平均気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)

	平均気温	降水量	日照時間
高い(多い)	60	40	20
平年並	30	40	40
低い(少ない)	10	20	40

(平成27年11月19日付沖縄気象台発表・沖縄地方1か月予報)

平年値

	平均気温(°C)	最高気温(°C)	最低気温(°C)	降水量(mm)	日照時間(h)
沖縄群島(那覇)	18.7	21.2	16.3	102.8	115.6

(沖縄気象台発表・統計期間1981～2010・資料年数30年)

II 12月の発生予報および防除上の注意事項

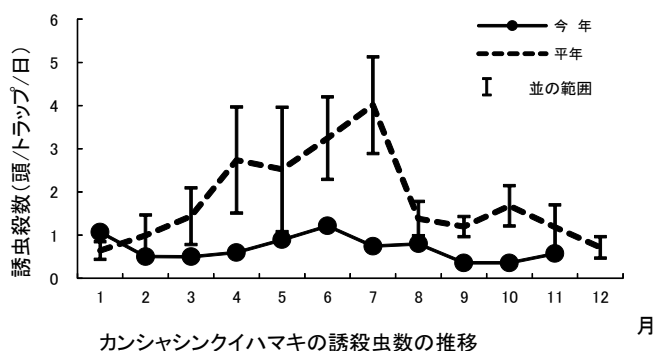
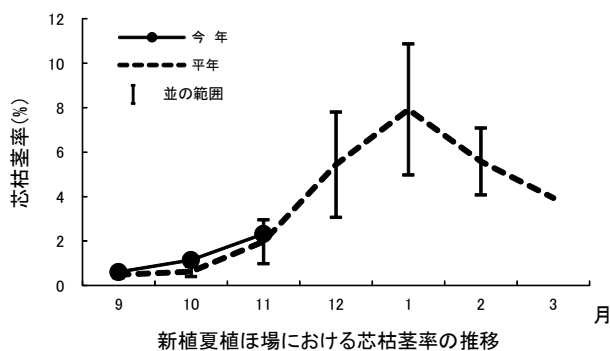
1 さとうきび

(1) カンシャシクイハマキ

発生の程度 : 並

予報の根拠

- a 11月中旬の調査の結果、株出ほ場における芯枯茎率は2.3%(前年1.2%、平年2.0%)と並であった。
- b 11月のカンシャシクイハマキ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.6頭(前年0.8頭、平年1.2頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

- a ふ化した幼虫は葉裏や葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- b 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- c ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- d 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- e 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- f 平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(平成27年4月30日付)参照。

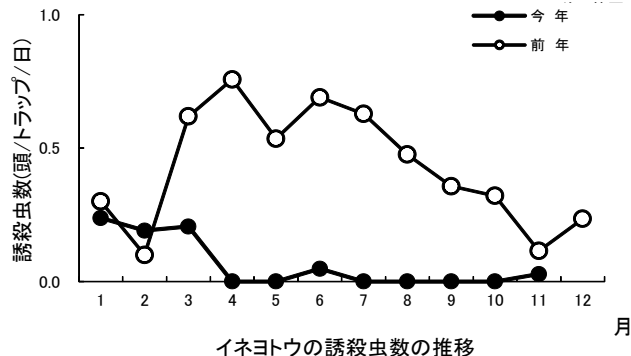
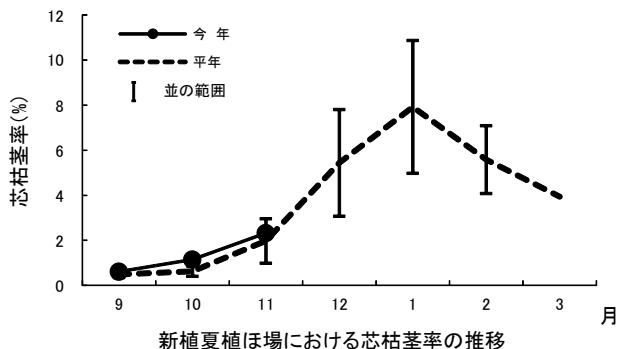
(2) イネヨトウ

発生の程度 : 並

予報の根拠

a 11月中旬の調査の結果、株出ほ場における芯枯茎率は2.3%(前年1.2%、平年2.0%)と並であった。

b 11月のイネヨトウ合成性フェロモントラップによるトラップ当たり日当たり誘殺虫数は0.1頭未満(前年0.4頭、例年0.2頭)であった。



<防除上注意すべき事項>

- 卵は塊で産み付けられ、ふ化した幼虫は葉鞘部から下部に移動した後、地上部の芽や根帯から食入し、生長点を加害して芯枯れを起こさせ茎を枯死させる。
- 加害による芯枯れを防止し有効茎を確保するため、培土時および生育初期の防除を徹底する。
- ほ場内外のイネ科雑草は発生源となるため除去する。
- 乳剤の場合は、葉鞘内に薬液がきちんと浸透するように丁寧に散布する。粉剤の場合は、茎と葉元の間散布し降雨や散水等により溶解させ、葉鞘内部へ浸透させることで防除効果が高まる。
- 培土時に土壌害虫の防除を兼ねた薬剤(粒剤)を選択し施用する。
- 平成27年度病害虫発生予察注意報第1号(平成27年4月30日付)参照。
- 平成27年度病害虫発生予報第6号(平成27年8月27日付)コラム参照

2 タンカン

○ カイガラムシ類の防除対策

- 11月中旬の調査の結果、全園地で果実に発生がみられた。
- 発生が多い園地では速やかに防除を実施する。
- 冬期のマシン油散布を徹底する。

○ ハダニ類の防除対策

- 11月中旬の調査の結果、寄生葉率は17.6%(前年0%、平年1.3%)、葉当たり雌成虫数は0.3頭であった。一部園地では果実に発生が見られた。
- 果実が食害されると着色が遅れたり光沢が損なわれたりするので、発生している園地では早期に薬剤防除を行う。
- 冬～春の低密度時期における薬剤防除に努める。
- 薬剤抵抗性を持つ個体が多いので、薬剤の選択に注意する。

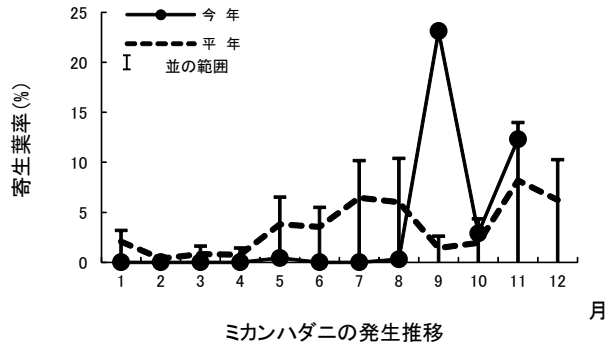
3 温州みかん

(1) ハダニ類

発生程度 : 並

予報の根拠

11月中旬の調査の結果、寄生葉率は12.3% (前年0%、平年8.2%)、葉当たり雌成虫数は0.3頭 (前年0頭、平年0.3頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- a 冬～春の低密度時期における薬剤防除に努める。
- b 薬剤抵抗性を持つ個体が多いので、薬剤の選択に注意する。

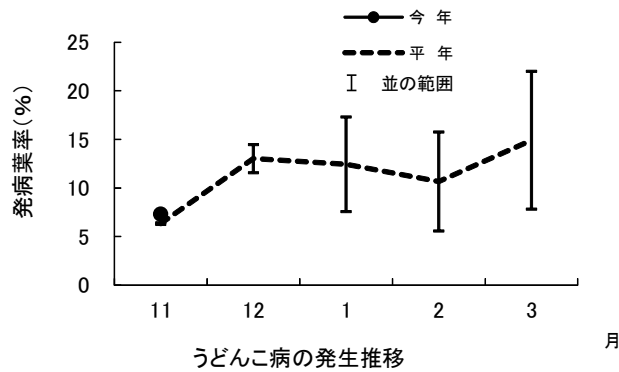
4 きゅうり(施設)

(1) うどんこ病

発生程度 : 並

予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は7.3% (前年5.4%、平年6.3%)と平年並であった。

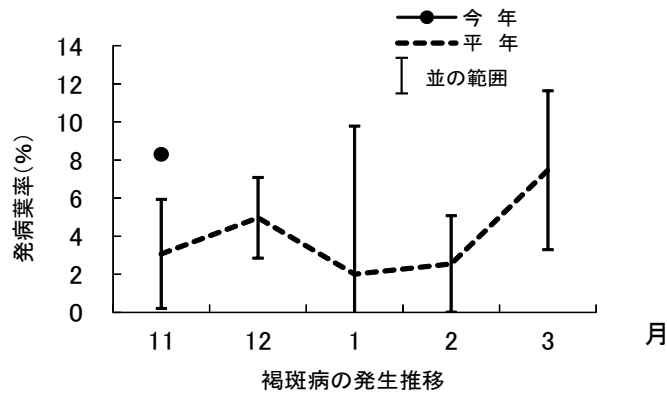


<防除上注意すべき事項>

- a 老葉や病葉は発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして施設外に持ち出し処分し、透光通風を良くする。

(2) 褐斑病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は8.3% (前年1.4%、平年3.1%)と平年よりやや高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a 多湿にならないよう、施設内の換気に注意する。
- b 下葉の老葉を早めに除去し、施設外に持ち出し処分する。
- c 薬剤耐性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

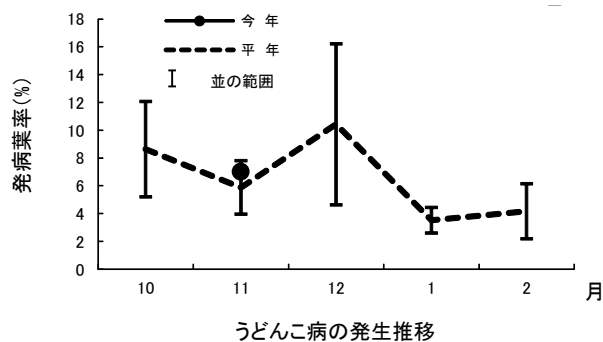
○ 黄化えそ病の防除対策

- a 11月下旬の調査結果、ウイルス病の発生株率は31.7%で、主に黄化えそ病(MYSV)であった。
- b 媒介虫であるミナミキイロアザミウマの防除を徹底する。
- c 施設の開口部は0.6mm以下の目合いのネットを用い、出入口は二重カーテンにする。
- d ほ場内外の雑草を除去する。
- e 発病株は抜き取り処分する。

5 にがうり(施設)

(1) うどんこ病
 発生程度 : やや多
 予報の根拠

11月下旬の調査結果、発病葉率は7.0% (前年9.2%、平年5.8%)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

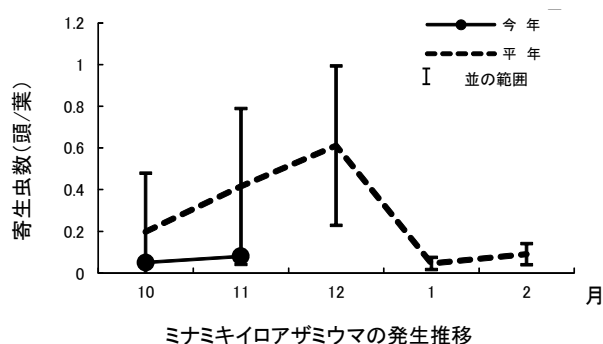
- a 発生源となる不要な老葉・下葉を除去し、透光通風をよくする。
- b 除去した葉は圃場内に放置せず、ビニール袋等に入れるなどして持ち出し処分する。
- c 薬剤防除は予防散布に重点をおく。

(2) ミナミキイロアザミウマ

発生程度：並

予報の根拠

11月下旬の調査結果、葉当たり成虫数は0.1頭(前年0.2頭、平年0.4頭)と平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除去する。
- 施設の出入口、天窓、側窓にはネット資材等を張り成虫の侵入を防ぐ。
- 摘心や摘葉後の残さは、本種の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして密封し、施設外に持ち出し処分する。

6 トマト

○すすかび病の防除対策

- 11月下旬の調査の結果、発病葉率は5.1%であった。
- ハウスでは排水や換気をよくし、多湿を避ける。
- 被害植物の残さはほ場内に残さず、処分する。
- 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- 薬剤抵抗性を発達させる可能性があるので、同系統薬剤の連用を避ける。

7 ピーマン

○ミナミキイロアザミウマの防除対策

- 11月下旬の調査の結果、葉当たり成虫数は0.05頭(前年0頭、平年0.01頭未満)と平年より多かった。
- 一部ほ場で多発生がみられた。
- 施設の出入口には二重カーテンなどを設置し、本種の侵入を防ぐ。
- 施設周辺の雑草は本種の発生源となるので、除草を行う。
- 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除を徹底する。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

8 キャベツ

○菌核病の防除対策

- 11月中旬の調査の結果、被害株率は0.1%(前年0%、平年0.1%未満)であった。
- 発病株は菌核を生じないうちに除去し、ビニール袋に入れるなどして密閉処理し、ほ場外へ持ち出し処分する。
- 例年発生時期に当たるので、早期防除に努める。

○軟腐病の防除対策

- 11月中旬の調査の結果、被害株率は1.0%であった。
- 予防防除を徹底する。
- 発生拡大を防ぐため、薬剤散布による早期防除に努める。
- 病株は被害拡大の原因になるので、早めに抜き取って処分する。

9 レタス

- 軟腐病の防除対策
 - a 11月中旬の調査の結果、被害株率は0.5% (前年0%、平年0.1%未満)であった。
 - b 予防防除を徹底する。
 - c 発生拡大を防ぐため、薬剤散布による早期防除に努める。
 - d 病株は被害拡大の原因になるので、早めに抜き取って処分する。
 - e 高温多湿条件下で発生しやすい。気象予報によると、気温は平年より高く、降水量は平年並か多いと予想されている。

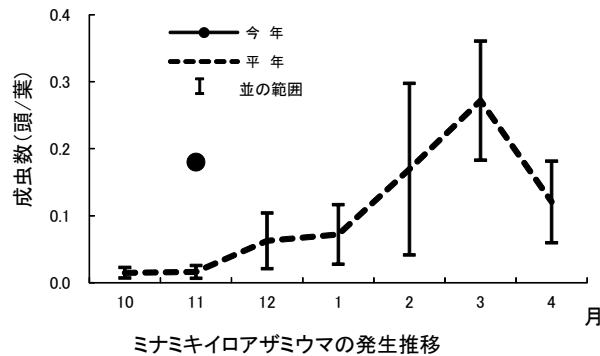
10 さやいんげん(平張)

(1) ミナミキイロアザミウマ

発生程度 : 多

予報の根拠

11月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.2頭(前年0頭、平年0.1頭未満)と平年より多かった。



<防除上注意すべき事項>

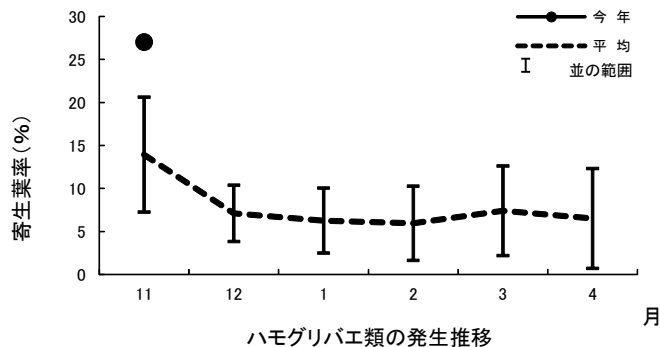
- a 発生源となるほ場内外の雑草を除去する。
- b 除去した寄主植物はビニール袋などに密閉し、施設外に持ち出し処分する。
- c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

(2) ハモグリバエ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

11月中旬の調査の結果、寄生葉率は27% (前年0%、平年14%)と平年よりやや高かった。一部ほ場で多発した。



<防除上注意すべき事項>

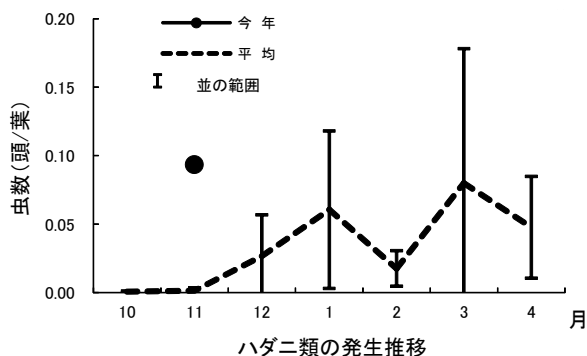
- a 摘葉等による残さは成虫の発生源となるので、ビニール袋に入れるなどして、ほ場外に持ち出し処分する。
- b 本種は薬剤抵抗性が発達し、また野外に多数の在来天敵が存在することから、天敵に影響の少ない選択性殺虫剤を使用する。

(3) ハダニ類

発生程度 : 多

予報の根拠

11月中旬の調査の結果、葉当たり虫数は0.1頭(前年0頭、平年0.1頭未満)と平年より高かった。



<防除上注意すべき事項>

- a ハダニ類は乾燥条件下で発生しやすい。
- b 発生源となるほ場内外の雑草を除去する。
- c 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。

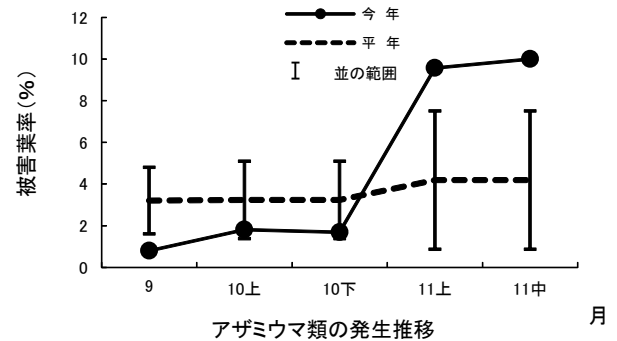
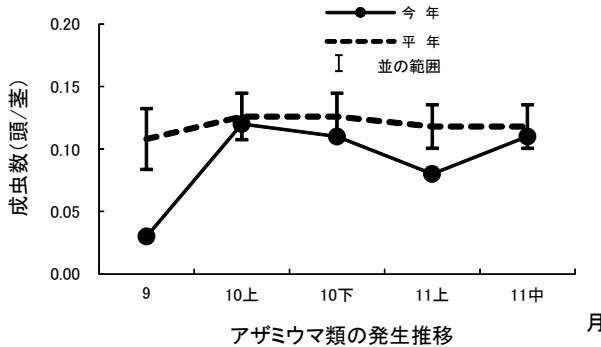
11 小ぎく(年末出荷用)

(1) アザミウマ類

発生程度 : 並

予報の根拠

- 11月の調査の結果、茎当たり成虫数は上旬0.28頭、中旬0.12頭(前年0.46頭、平年0.17頭)と上旬は平年よりやや多く、中旬は平年並であった。
- 被害葉率は上旬11.2%、中旬6.7%(前年9.8%、平年5.3%)と上旬は平年よりやや高く、中旬は平年並であった。



<防除上注意すべき事項>

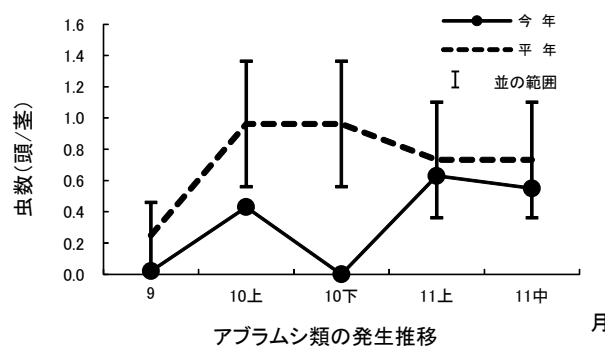
- 成虫は新葉や上位葉に、幼虫は上～中位葉の葉裏に多いことに留意しながら、丁寧に薬剤散布を行う。
- 同一ほ場内にあるキクは、異なる品種、異なる成長段階であっても、同時に防除を行う。
- 地際部から新しく出てきた脇芽は、アザミウマが増殖しやすいので、早めに除去する。
- ほ場内外の雑草や収穫終了ほ場の残渣は発生源となるので、早めに除去する。
- 平成27年度病虫害発生予察注意報第2号(平成27年10月30日付)参照

(2) ハダニ類

発生程度 : やや多

予報の根拠

- 11月の調査の結果、寄生茎率は上旬2.2%、中旬12.8%(前年11.1%、平年12.0%)と上旬は平年より少なく、中旬は平年よりやや高かった。
- 1茎当たり雌成虫数は上旬0.02頭、中旬0.92頭であった。
- 一部ほ場で多発生がみられた。



<防除上注意すべき事項>

- ハダニ類は乾燥条件下で発生しやすい。
- 本県で発生の確認されている種はナミハダニ黄緑型である。
- 薬剤抵抗性を発達させやすいので、同系統薬剤の連用を避ける。